ひだご坊
No.270
2012年1月20日

発行　真宗大谷派 高山教務所
発行者　大町慶華
〒506-0837 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
＊毎月20日発行　50,000部
三市一郡無料配布
印刷　山都印刷株式会社

念じられ照らされて

ぼく、「やっと」こんなことに気づきました

佐賀枝夏文

（略歴）
一九四八年富山県生まれ、大谷大学大学院修了後、福祉実践。一九八六年大谷大学短期大学部の専任講師に就任。現在同文学部教授。

ぼくの「ひとり言」を聞いてくださいますか。

ぼくは、少年時代に早く父と死別しました。その後母とも別れて暮らしました。おそらく、このふたつの出来事が、いまの「じぶん」の性分に深く影響しているとおもうんです。また、専門としている福祉とカウンセリングにも自然と入り込みました。その理由は、ぼくはさみしく、自信のない少年時代に、真剣に自分が「変わること」や青い鳥を待ちこがれていたからです。自分が誕生したこともうとましく、「生まれてこなければ…」と考えたこともしばしばありました。そのぼくは思春期に、気がつけば円形脱毛症になり、神経質な性分になり、なにごとにも自信が無く、まさに「人生の迷子」になっていました。迷子になったぼくは、懸命にトンネルから「出口」を探しはじめました。出口の向こうに脱出できれば「幸せ」があるとおもったのでしょう。人一倍がんばったようにおもいます。闇のトンネルから出るには、福祉やカウンセリングを勉強すれば救われると考えたようです。いつの間にか、福祉の現場で実践とカウンセリングに打ち込みはじめていました。

ながーい間、懸命に、そして真剣に、福祉の現場で仕事をしていました。それは、福祉が必要な子どもたちや、悩んでいる方に、「少しでも問題を解決するお手伝いができれば…」と実践していました。

…ここまで、一読していただいて間違いではないようにおもわれるかもしれません。でも、ここに、「落とし穴」があったようにおもうのです。

ことばにこそしませんでしたが、「真面目に、努力すれば…、いつかなんとかなるのでは…」ということがあったようにおもうのです。これも、常識では間違いとはいえないかもしれません。しかし、歳を重ねるたびに「じぶん」自身が「やっかいのかたまり」となっていたのです。ひとに「こうすべき」、「だから、うまくいかないのだ」、また「じぶん」にたいしてもおなじです。なんとも「やっかいなひと」が出来上がっていました。

このような、ぼくのカウンセリングは、実にやっかいなものだったと反省しています。暴走する少年、自傷行為する少女、万引きした少女、過食する女性、不登校の生徒などなどと会いました。はなしを聴いて、いかにもわかった顔をしているのですが、腹の中では「そんなこと、しなければいいのに」と考えたりしました。あぁーなんと、恥ずかしい「ひや汗」がでます。

「聞こえた」歎異抄第二章

実は、恥ずかしいことですが何度読んでも『歎異抄』が読めなくて、わからなくて…。

「…おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。」の文を読むたびに、いつも、ぼくは時代が時代だから、遠路の旅路は大変だったろうなと、勝手に考えて読み飛ばしていました。あるとき…、**真宗の教えって「ひっくりかえることが大事なのではないかと思ったんです。**

聞こえたんです…、バイクで暴走する少年、カッターナイフで自傷行為する少女、コンビニで万引きする少女、過食する女性、不登校の生徒のひとり残らず、「いのち」をかけてその行為をくり返しているということなんです。この子どもたちは、闇の出口を求めて…。ぼくが、闇のなかで出口を探していたのと、子ども達が出口を探し求めていることが、まったく「同じ」だったんです。「死にたい、死にたい」という深い叫びは、実は極楽往生を求めての「生きたい、生きたい」だったのです。懸命に格闘すれば、ますます、「よろい」をまとうことになります。もういいから…あなたは「大事」…、重い「よろい」を脱いでいいのです…と『歎異抄』から「聞こえます」。

…だから、「いま」ぼくは「聞こえた声」を、伝えなければとおもうのです。

①興福寺よりの二位の尊長　②朝廷の検非違使周防判官元国
③検非違使伊賀判官末貞　④住蓮房

専修念仏の取り締まり

絵解親鸞聖人絵伝20

親鸞聖人絵伝下巻第一段「念仏停止」

弥陀の本願他力の念仏を称えるだけで、あらゆる人が皆等しく浄土に往生できるという、法然上人の説く専修念仏の教えは多くの人びとの間に広まっていきました。

しかし、上人の門弟を名のる者の中にはこの教えを充分理解せず、また曲解をして悪行を勧めたり、善行を重ね自力で救われようとする聖道門の人たちを妬める者もいて、軋轢を生じるようになりました。比叡山延暦寺が抗議をしてきたため、一二〇四（元久元）年、憂慮した法然上人は、門弟の守るべき戒めをあらわし（「七箇条の制誡」）厳守するよう求め、署名をさせました。その百九十人のなか八十七番目に、親鸞聖人は当時の名のり「僧綽空」で署名をされています。

それでもいつこうに「専修念仏の徒」の行いが改まらないとして、一二〇五（元久二）年、奈良の興福寺は、解脱房貞慶上人に法然上人と門弟たちの過失として九カ条を書きあげさせ（「興福寺奏状」）、幕府に専修念仏の停止を訴えました。

新春のご挨拶

高山教務所長
高山別院輪番　大町慶華

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年は、東日本大震災に際しましては、物心両面にわたりご協力を賜り、さらに、救援金のご協力いただきましたことと厚く御礼申し上げます。また宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が厳修されましたが、震災により、予定していました御遠忌法要の内容が一部変更になり、教区の日も取りやめるということになりました。皆様にご迷惑をおかけいたしましたことお詫び申し上げます。

さて、新たな年を迎えることになりましたが、昨年は、宗派の御遠忌を終え、今年から教区・別院の御遠忌を迎えるための計画を進める年となりました。委員会においてどのような御遠忌をお勤めするのかを検討を重ねて行きたいと思います。

また今年は、同朋会運動が五十年を迎える年となります。その間、多くの推進員が誕生しました。しかし、最近は、特に若い方々の推進員としての誕生が少なく、五十年以後の歩みとしては、様々な方々に魅力ある運動として新たな歩みを検討することが必要となってきました。いままでの歩みを点検・総括をしていく必要があり、教化の節目の年であります。どうか皆様とともに今年も歩んでまいりたいと思いますので、何卒よろしくお願いします。

☎テレホン法話（0577（34）2313）○1月21日～31日…細川宗徳氏　○2月1日～10日…三島見らん氏　○2月11日～20日…堤唯見氏

✿宗教トラブル秘相談窓口（0577-32-0763）

今月より、高田教区の井上円先生に、『恵信尼消息』から見える親鸞像」のタイトルで連載いただきます。

（略歴）
一九五六年、新潟県上越市（旧直江津市）に生まれる。大谷大学大学院博士課程を満期退学後、同大学非常勤講師を経て、浄泉寺住職に就く。現在、高田教区教化委員・教区真宗教化研鑽室「聞思学場」室長・普等学舎代表。

『恵信尼消息』から見える親鸞像

大震災直後の御遠忌「被災者支援のつどい」

井上　円

二〇一一年、待望されていた法然上人八百回・親鸞聖人七百五十回御遠忌を迎える直前の三月十一日、あの東日本大震災は発生した。マグニチュード9.0の巨大地震、その後に起こった大津波は、港を、町を、田畑を次々と容赦なく呑み込んでいった。その甚大な被害の様子は、テレビ映像を通してリアルタイムで全国に配信された。頑強に作られていたはずの防波堤は、見る影もなく倒壊した。引火した火災が、津波の上を動いて行く。逃げ惑う車、必死に助けようとする人、逃げろと叫ぶ声、呆然と立ちつくす人影、多くの命が失われた。（十二月二日現在、死者一五・八四〇人、行方不明三・五四六人）

直後の福島第一原子力発電所の大事故による放射性物質の拡散は、更に深刻な事態をもたらせた。電源を失った原発は、「止める」「冷やす」「閉じ込める」の安全三原則は崩れ、その安全神話をいとも簡単に失墜させた。海水注入、被曝、水素爆発、炉心溶解、事態が明らかになるたびに、避難指示の範囲は広がっていった。

首都圏では、JRをはじめ、私鉄・地下鉄が運転を見合わせた。家に帰ろうとバスやタクシー乗り場には長い列ができ、黙々と歩く人が舗道をうめた。幹線道路は大渋滞が続き、携帯電話がつながらない為、公衆電話にも列ができ、多くの帰宅困難者がうまれた。緊急帰国、買い占め、計画停電、大都会でも人々の不安と不満が膨れ上がった。

このような深刻な事態に対して、いち早く浄土宗は、「法然共生」という御遠忌法要を四月から十月に延期、期間中の十月十一日「東日本大震災物故者追悼法要」を執行した。西本願寺は、御遠忌スローガン「世のなか安穏なれ」の趣旨に合致するものとして厳修を決定。法要前日の四月八日、「東日本大震災追悼法要」を勤めた後、計画通りに御遠忌法要を執行していった。これに対して、東本願寺は、予定していた御遠忌第一期法要の中止を決定し、三月十九日から十日間の「被災者支援のつどい」に変更、「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という御遠忌企画も大幅に内容が変わっていった。

その変更の知らせが、私のところに来た。「このような事態、このような趣旨ですが、三月二十一日に京都に来て、お話しいただけるでしょうか」と。係の方の逼迫した声に応じて、これを承諾し、受話器を置いて、ハタと困ってしまった。「私に何が話せるだろうか。何を話さなければならないのだろうか。」悶々とした日が続いた。緊急地震速報と余震が続いていた。テレビは、震災関連の報道が続き、番組もCMも自粛の中、長男はうんざりしていた。春休みに初めてディズニーランドに行くことを楽しみにしていた娘は、開園中止の報道に不満だらけであった。そんな中、ある震災のニュースの映像が、私の家族を捉えた。それは中学生くらいの女の子が、丘の中腹から、廃墟となってしまった町に向かって、涙ながらに『お母さん、お母さん』と何度も叫ぶ姿であった。それを見た子どもたちの態度が一変した。

人を思い、悲泣している、ここに立たなければならない。ここに立っている親鸞聖人を明確にする話しをしなければならない。私の腹もようやく決まった。長年明らかにしたくて、充分できなかった『恵信尼消息』を手立てにしよう。親鸞聖人の最も近くで、その教えを聞き続けてきた恵信尼様の眼に写った親鸞聖人の像を明らかにできれば、「被災者支援のつどい」での私の役目は果たすことができる。

（以下二十回にわたり「被災者支援のつどい」で話しきれなかったものも含めて、まとめていきたい。また先学の業績の一々を紹介できない失礼を、はじめにお断りしておく。）

第30回 別院真宗公開講座

【第3回・第4回】

講師　戸次公正氏（大阪府）

第3回
日時　1月23日（月）午後2時～4時
講題　「仏教と原発 ―五濁の世、無仏の時に―」

第4回
日時　2月20日（月）午後2時～4時
講題　「真宗と原発 ―五濁の世、無仏の時に―」

会場　高山別院 御坊会館
聴講費　1回毎600円
※当日受付にてお支払い下さい。

聖教学習会

期日　①1月24日（火）②2月8日（水）③3月7日（水）
時間　午後1時30分～午後4時30分
会場　高山別院会館 2階研修室
講師　安冨信哉氏（大谷大学特別任用教授）
講題　「信の系譜 ―法然から親鸞へ―」
会費　無料

婦人聞法会

日時　2月22日（水）午後1時から
会場　高山別院 御坊会館
講師　馬川透氏（高岡教区眞敎寺）「婆婆と浄土」
講題　高山二組坊守会
主催

結御膳祭

十二月十六日（金）、白川村平瀬公民館にて高島外成住職（白川組常徳寺）導師のもと「報恩講」が勤められ、その後、結御膳祭が開かれました。

今年で五回目となるご門徒主催の結御膳祭は、報恩講にお参り下さった方々と縁を結び交流を深めていくという想いが込められています。報恩講料理として振舞われた御膳は、休耕田を利用して作った野菜や、春に収穫した山菜を中心に作られています。

昔は、先人や農地に感謝し、身内や縁ある方を呼んで各家で報恩講を勤め振舞っていたが、今は簡素化されつつあります。しかし、大切なことは残していかなければならないという想いで始められ、五回目となる今年は、約七十名ものお参りがありました。参詣者はお斎をいただきながら互いに語り合い、交流を深めていました。

報告と御礼

被災地復興支援のためのチャリティーTシャツは、おかげさまで現在までに1,000枚以上売り上げ、683,439円集まりました。

これらは、被災地への義援金及びボランティア活動資金とさせていただきます。売り上げにご協力いただき誠にありがとうございました。

飛騨御坊ボランティア委員会

"東日本大震災を心に刻む集会 Part Ⅲ"開催

本日開催

「いのちのさけび」

～震災と原発災害に聞く～

「お願いです、福島をたすけてください…」
被災地のいのちのさけびに耳を澄まそう。
現地で懸命に今を生き、立ち上がって歩み出している方と向き合い、
今、この私のいのちにその声を刻む。

講演
佐々木道範さん（福島県二本松市）
講題「福島を生きる」
関口真爾さん（宮城県仙台市）
講題「被災地のさけび」

入場無料

日時　2012年1月20日（金）夜7時から
会場　高山別院　御坊会館

飛騨御坊ボランティア委員会

定例法座・法話（午後1時から）　○1月21日（土）…小原行忠氏　○1月27日（金）…大町慶華輪番　○1月28日（土）…北條良樹氏　○2月1日（水）…平野素浄氏　○2月11日（土）…大町慶華輪番　○2月13日（月）…春國文春氏